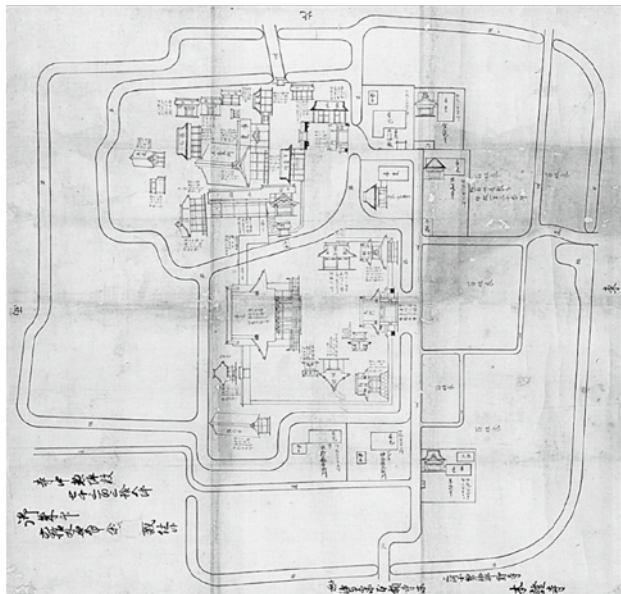


文化財
ジャーナル
vol.62

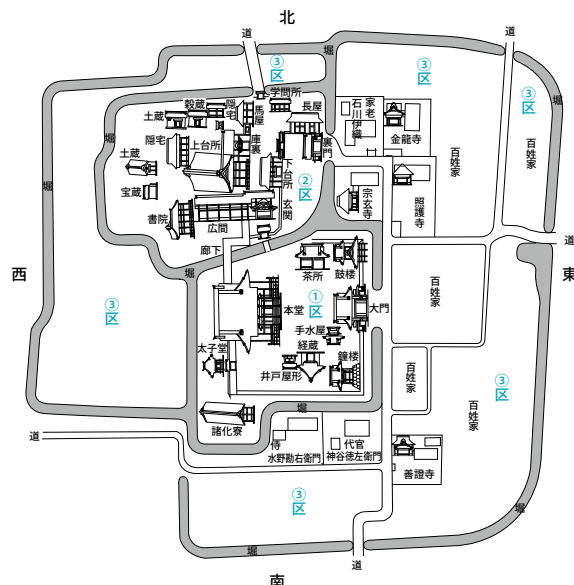
じょうかく がらん ゆえん
城郭伽藍の所以

ほんしょうじ がらん えす
本證寺伽藍絵図



「本證寺伽藍絵図」寛政年間（1789-1801）

絵図は地図ではなく、あくまで絵です。縮尺は一定ではありません。描かれた向きは西が上ですが、私たちが理解しやすいように北を上に掲載しています。



「本證寺伽藍絵図」写し

城のような寺

本證寺は、野寺町に所在する鎌倉時代創建と伝わる真宗寺院で、境内とその周辺は「本證寺境内」として国史跡に指定されています。歴史好きの方なら、三河一向一揆（1563）で徳川家康（当時は松平）と敵対した中心寺院としてご存じかと思います。ところで、本證寺の特徴を表す「城郭伽藍」※1という言葉を目にしたことはありますか。字面を見ると「城のような寺」です。では、本證寺の何が「城のよう」なのでしょう。

境内を囲う二重の堀

その手掛かりは、江戸時代後期の寛政年間（1789～1801）に描かれた「本證寺伽藍絵図」（以下、絵図）にあります。

この絵図を見て最初に目に飛び込んでくるのは、中心に描かれた本堂やその北側に建ち並ぶ庫裏等の建物群ですが、今回注目してほしいのは、その境内の周りをくねくねと囲むように描かれた線です。そこには、「道」あるいは「堀」と書かれています。本堂のある区画（①区）と庫裏のある区画（②区）を囲む堀は、ほとんど現在残っている堀の姿そのままです。この堀を内堀と呼んでいます。

そして、境内だけでなく、東の「百姓家」や南の「善證寺」「代官神谷徳左衛門」など（③区）すべてを大きく囲む堀が描かれています。この堀を外堀と呼んでいます。外堀は、現在ほとんど地表で確認することはできません。この絵図のと

おりだしたら、本證寺は内堀と外堀からなる二重の堀に囲まれていたことになります。

また、絵図には描かれていませんが、庫裏の北側には堀に沿って土塁が残されています。

絵図に描かれた「二重の堀」と、往時の面影を残して現存する「内堀と土塁」は、「三河一向一揆」という歴史的事件と結びつき、本證寺は「城のような防御施設をもった寺」というイメージが定着していきました。

絵図は正確なのか？

それでは、絵図に描かれた「二重の堀」の景観は実在したのでしょうか。その実態を把握するために、安城市教育委員会では平成21年（2009）以降発掘調査を計画的にしています。これにより絵図に描かれたとおりの外堀がほとんど壊されることなく、現在も地中に埋まっていることが分かってきました。それと同時に、三河一向一揆が起こった戦国期の堀の様子は、絵図とは異なっていたことも分かってきました。

絵図と発掘調査成果とを照らし合わせた話は、長くなりそうですので、また次の機会にしましょう。

※1「城郭伽藍」は、仏教考古学者石田茂作によって昭和31・59年（1956・1984）に伽藍配置の分類の一つとして定義された。それによると、境内周囲の濠（堀）や敵襲に備えた鼓樓等を備え、有事には門前の橋をはずして寺内に立て籠ることができるようになっているとされる。その事例として京都府の東本願寺・西本願寺等とともに本證寺が挙げられている。